災害避難所における子どもへの対応を考える

Consider

避難所運営で考えたいこと

災害発生後に課題となるのが、被災後の子どもの対応です。これまでの避難所では、「子どもが騒ぐ・子どもが泣く」、「ストレスを抱えている子どもがいる」という報告があり、心のケアが必要であると指摘されています。また、復旧や復興において、子どもの面倒を誰がみるのかという課題も発生していました。

しかし被災後は、子どもたちに目を向ける余裕がなく、後回しになる傾向がありました。我慢を強いられる子どもたちの居場所がないという状況だったのです。そこで、何らかの遊びなどで発散させることが有効な手段となるのですが、音の問題や場の確保も困難な状況など、結局、各自に任せることがほとんどでした。近年のウクライナ情勢やトルコ・シリア大地震でも、避難者の多くが子どもであり、その対応に苦慮していることが報道されています。

現在、国立大学法人鳴門教育大学と、(株) おもちゃ王国 (岡山県玉野市)、(株)ヴィットハート (岡山県岡山市) の三者で、“遊びと学び” をテーマにした「産学共同研究」を、2008年度から実施してきました。ここで開発した玩具などが、現在教育現場などで活用されていますが、災害発生時にも有効ではないかという指摘があり、この点に着目して研究を進めてきました。現在も継続中であり、2022年度からは、科学研究費助成事業 (基盤研究 (C) 22K02574) にも採択されました。このリーフレットは、その中間報告として作成されたものです。

Leaflet Consideration

Support

避難所での子どもへの対応

避難所には、安心できる居場所（空間・時間・仲間）を作ることが、復旧や復興につながるものと考えます。そのため、避難所の状態によって、子ども・保護者に対する対応を配慮することが重要ではないかと思われます。

2022年5月から11月にかけて、全国の620名の教職員（小中高）を対象に、学校避難所の実態について調査しました。その結果、学校が作成している『災害対応マニュアル』に、避難所対応を明記し、「子どもの声が騒がしい」などの苦情への対処や環境改善などを想定していると答えた教職員はわずか57名（9.2%）でした。一方で、もし学校が避難所になった場合、「子どもの居場所を確保する」と答えた教職員は377名（61%）と意外に多く、いざとなれば必要な方策であると考えていることが分かりました。しかし、その際に必要な玩具等を学校が保有しているかなど、子どもへの具体的な対応を想定している教職員は35%程度しかいないという実態も明らかになりました。

本プロジェクトでは、以下の3つの段階の状況を想定して、対応を考えてみました。

フェーズ1
被災後、
避難所が開設されて
間もない状況

フェーズ2
避難所の
自治が開始され、
ライフラインが復帰
し始めた状況

フェーズ3
大人たちが復旧・
復興作業を
始めた状況

フェーズ1における対応

1. 子どもの心理状況の想定

不安・状況が理解できていない・
家に帰りたい・怖い・ストレス

2. 保護者の心理状況の想定

不安が強いが、まず家族の安全を確保している。
何をしていいのか分からないという状況が
想定される。

3. どのような対応をすべきか

フェーズ1では避難所が開設されてまもない状況ですので、避難所の自治運営が出来ていないと考えられます。また、**避難所では家族単位で固まって生活することが考えられ**、これらのことから**一人遊びが中心**となり、絵本やゲームを使用して、遊ぶことが想定されます。しかし、停電などになると、こうした遊びはなかなか出来ないというケースが考えられます。（写真は、**一人遊びも可能なブロック玩具「ポリエム」**）

フェーズ2における対応

1. 子どもの心理状況の想定

今なお、不安・状況が理解できていない・
家に帰りたい・怖い・ストレス

2. 保護者の心理状況の想定

避難所の自治が行われ始め、忙しくなる・
家や付近の復興に向けた作業が徐々に
動き始める。

3. どのような対応をすべきか

フェーズ2では避難所の自治が始まり、大人が忙しくなる状況が想定されます。また、子どもたちは今までの遊びに**飽きてきている状況**だと考えられ、そのため**子ども間の交流が生まれやすくなります**。新しい遊びの提案や、一緒に行える遊び場の提供が必要となりますが、遊ぶ場は限定されることが想定されます。（写真は、教室内にブルーシートを敷いて、避難所での遊び場を確保する実験：鳴門教育大学講義室にて）

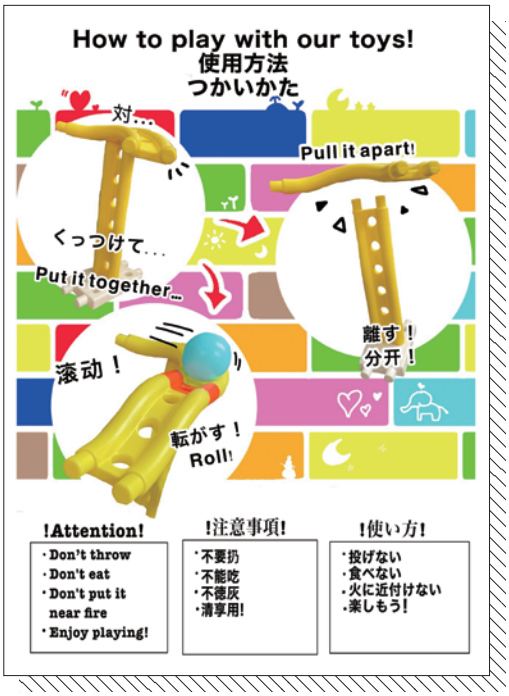
フェーズ3における対応

1. 子どもの心理状況の想定	2. 保護者の心理状況の想定
親が忙しく寂しい、 置いていかれて不安	復旧・復興に忙しい、 子どもにかまっていられない状況

3. どのような対応をすべきか

大人が本格的な復興を始めた時期には、子どもたちだけで遊ぶ必要があります。ここではライフラインの復旧がある程度見込まれるため、TVやタブレットも使えますが、それ以上に体を動かして遊ぶことや、広い場所での遊びの提供が望まれます。しかし、運動場や体育館は使えず、安全を確保しないといけませんから、フェーズ2の段階と大きな違いはありません。そこで、**近隣の中学生や高校生などの若い人材こそ、遊び支援のボランティアになる**と思われます。これは、フェーズ1、2でも必要な動きです。そのため、事前に「災害ボランティア」の育成という施策や活動が望まれます。

さて、災害弱者には、子どもや高齢者だけでなく、**外国人など言語が異なる子どもたちの存在も想定されます。**本プロジェクトでは、そうした子どもたちにも対応できるよう「**英語バージョンのブロック遊びのマニュアル**」（下掲）を作成中です。こうした多言語の簡単な遊び方マニュアルを、遊び支援のボランティアが所持することで、スムーズな遊びへの誘導が可能となります。



提 言 | 遊び支援のボランティアの育成について

今年度、おもちゃ王国プロジェクトの活動の一環で、幼・小・中連携推進事業を推進している徳島県板野町板野中学校において、「**避難所メンタルサポートシミュレーション**」の行事（2022.11）が実施された。

これは、ジュニアブロック『はじめてセット』を使用して、中学生が遊びを通して幼児の精神的な支援ができるようにするための心構えを、大学生が教えるというユニークな試みであった。

震災が起きた時のことを想定して、避難所での生活をシミュレートしておくことはとても重要である。非常事態時に中学生が率先して避難所でのボランティアに参加することは大きな力となるであろう。

震災後の福島県における家庭での子どもの生活の変化を調べた研究によると、放射能の影響もあり、外（運動）遊びの時間や友達と遊ぶ時間が大幅に減っている一方で、テレビ・ビデオの視聴時間の割合が増えたことが明らかになっている（図1）。

この報告書では、幼稚園や保育所などでの事例として、震災後は「地震ごっこ」「津波ごっこ」を遊ぶ姿が見られたり、「外で遊びたい」という子は少なく、室内で活動することが当然という様子であったり、泣いたり暴れたりなどの様子は少ないが教師の傍らにいたり、表情の硬い子が多くいたりしたことなども報告されている。子どもたちの生活や精神面への影響が大きいことがうかがえる。

したがって、避難所において子どもたちが不安にならないように、避難所でどのようなことに心がけて対応したらいいかをどのように中学生に教えるか、私たちが話し合いの中で考えてきたことを述べてみたい。

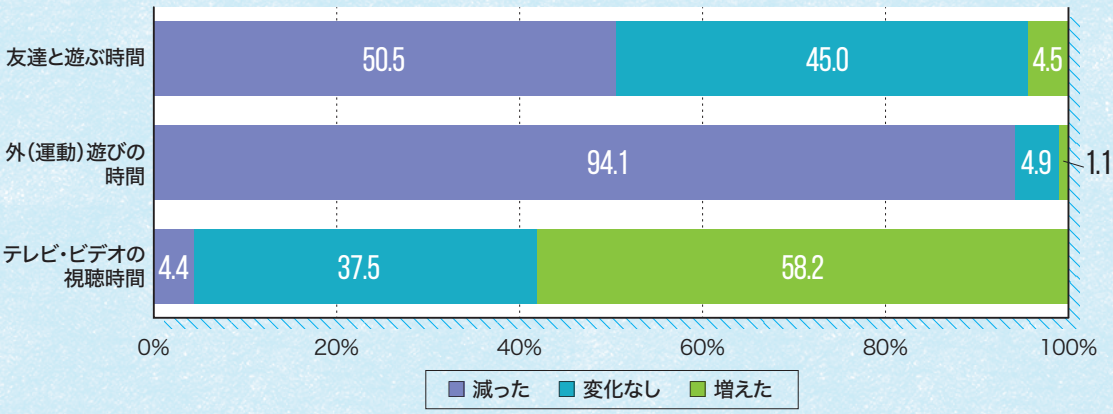


図1：震災後の子どもの生活の変化（日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会（2013）より作成）

Agency

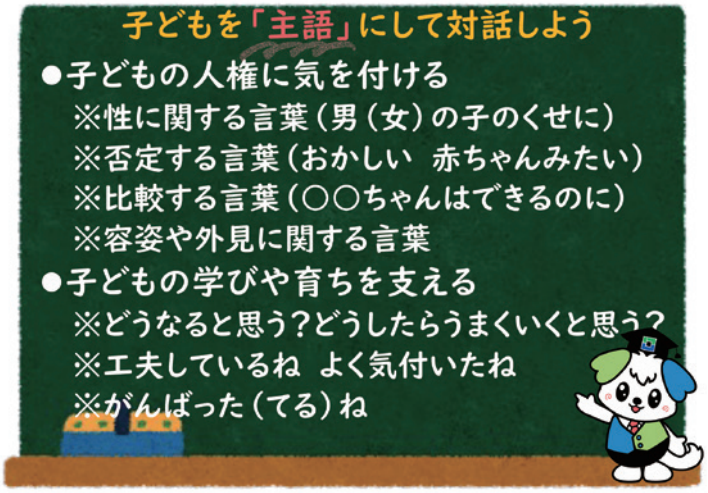
Ⅰ 子どもを「主体」にして考えよう

幼児期における教育は、生涯にわたる人間形成の基礎、生きる力の基礎を培うために大切である。培うとは、もともとは土養う、すなわち、根元に土をかけて、植物を育てるという意味がある。草花は、太陽の光、温度、肥えた土などの条件がすべて揃って、はじめてのびのびと育つ。まったく与えないのも、たくさん与え過ぎても、枯らしてしまう。学校教育法に「適当な環境を与えて」とあるように、テキトウではない適当さが大切である。しかも植物の種類や特徴によっても育て方がそれぞれ違う。

私たちの役割は、子どもを「**主体**」にして、「**適当な環境**」を用意し、自ら環境から栄養を取り込んで成長することを待つしかない。子どもたちが安心して遊びに没頭するための環境としては、精神的に安定して、自由に遊ぶ「時間」、遊びに必要なスペースや魅力的な遊具などを備えた「空間」、信頼できる大人や友達などの「仲間」などが必要である。いわゆる「**三間**」が、避難所においても大切な条件になるであろう。

Subject

Ⅱ 子どもを「主語」にして対話しよう



震災や自然災害等の被災者に対して、善意で声を掛けたつもりが、かえって相手を傷つけてしまったり、無責任な発言に聞こえてしまったり、心配になる。ましてや繊細な心をもつ子どもたちにどのような言葉をかけたらいいのであろうか。

子どもの中には、地震や津波、水害や土砂災害などの不安や恐怖に怯えている子ども、住む家や家族を失った子どもなどいろいろな状況の子どもがいるであろう。そうした子どもとまず同じ目線や同じ立場に立って、心に寄り添おうとする態度が必要である。

したがって、私たちは子どもの人権を尊重した心遣いや言葉遣いに気を付けること、子どもの学びや育ちを支えるために、**子どもを「主語」にして語ることが重要である。**子どもたちに何かしてあげたいと願うことが、子どもを上からの目線で捉えることになったり、一方通行になったりすることもある。心を通わせながら対話を心掛けることも大切であろう。

Protagonist

Ⅲ 子どもを「主役」にしてサポートしよう

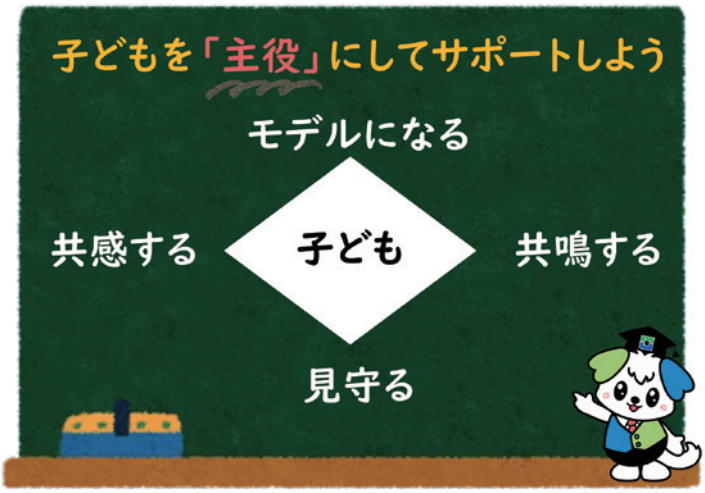


図2：子どもを「主役」にした臨機応変な対応
（小川（2010）を筆者改変）

避難所におけるメンタルサポーターとして、子どもと一緒にブロックで遊ぶことを例に考えてみよう。①大人がモデルになってブロックを楽しんで遊ぶことによって、子どもがブロックに興味や関心をもち、やってみよう、試してみようという気持ちになって遊び始めたり、②子どもの遊びに共感したり会話したり、③子どもが楽しんでいることに共鳴して一緒に遊んだり、④大人の手助けを必要とせずに、子どもが友達と夢中に遊んでいるときには一歩下がって見守ることも大切である（図2）。

このように、**子どもを「主役」にしたサポートには様々な役割がある。**どの立ち位置が正しいというものではない。子どもの発達や個性など一人一人違うし、遊ぶ時間や場所などもそれぞれ異なる。そうした状況や子どもの様子などをよく観察して、よく見極めて、臨機応変に対応することが求められる。

「**避難所メンタルサポートシミュレーション**」の行事で、上記3つの心構えを大学生が説明した後に、実際に中学生と一緒にブロックで遊んでみたところ、中学生が夢中になって遊ぶ姿が見られた。子どもの頃を思い出し、自分の中の子どもを呼び起こす経験になったと思われる。

南海トラフ巨大地震がいつ発生してもおかしくないと言われている。そうした危機感をリアルにもちながら、避難所における子どもとの関わりをシミュレートできたかについては課題が残るが、**被災した子どもたちにとっては、中学生が心から楽しんで遊ぶ姿を見せることが安心感や生きる勇気を与えるのかもしれない**。

子どもたちが伸び伸び育つ環境として「三間」が大切であることは、日常生活においても、避難所においても、全く同じである。何か特別な環境が必要ではない。子どもにとって必要な避難所とは何か、避難所が子どもの居場所の機能を果たすにはどうあるべきか、今後も子どもを真ん中にして検討していきたい。

（教授／湯地宏樹）

引用文献　小川博久『保育援助論』萌文書林、2010年
日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会『震災を生きる子どもと保育』、2013年

作 成 国立大学法人鳴門教育大学おもちゃ王国プロジェクト［産学共同研究］

担 当 阪根　健二［特命教授］／湯地　宏樹［教授］／北島　孝昭［元北島町教育長］

協 力 ㈱おもちゃ王国［岡山県玉野市］
㈱ヴィットハート［岡山県岡山市］
板野町板野中学校［徳島県板野町］
徳島県教育委員会［幼・小・中連携推進事業「学びのかけ橋」プロジェクト事業］

作成・研究実践チーム おもちゃ王国プロジェクト登録メンバー［2022年度］

有本　真菜／伊藤　愛莉／伊藤　陸人／犬伏　真結／稲積　沙季
井上　聖菜／岩藤　彩華／大内さゆり／太田　優輝／大宅　咲穂
小倉圭太郎／片山　茉歩／加藤　楓／角田　陽希／金川　直央
亀井翔太朗／川上満莉奈／木村　心優／工藤　叶羽／駒井友香子
坂井ほのか／酒巻　菜穂／秦　一花／問山　裕海／那須　悠一
西井　ゆい／西尾　忠恭／濱崎　柚月／秀野　真一／福森　良子
堀　紗弥花／堀　楓花／前田　夏希／前田　桃花／松井　健大
松岡　勇和［代表］／松尾　圭登／三嶋　礼華／宮本　愛弓
宮脇　日毬／邑橋　琴葉／森添　柚／森　瑛裕／吉川　桜生
米花　純麗／渡邊　美月／和田　時苑